

平成19年度（2007年度）

国際教育

地球市民を地域とともに育てよう Part 6

報告書



財団法人滋賀県国際協会

はじめに

一昔前に、「事件は現場で起こっているんだ」という映画のセリフがありましたが、今年度は正に「現場を訪れなければ、見えないこと、わからないことがたくさんある」ということを実感した一年でした。国際教育協働推進事業を取り組み始めて6年を迎え、「国際社会の一員として主体的に考え行動する人材を育成する」ために、この事業の今後の方向性を見定める時期にあることを感じていました。

そこで、国際教育の現場でどのようなことが求められているのか、何が起きているのかを再確認するために、今年度は「国際教育・多文化共生教育スタディツアー」を開催することにしました。

今回のスタディツアーでは、特に外国人児童生徒の学習に携わるさまざまな現場を訪れ、子どもたちが決して十分とはいえない環境の中で、ひたむきに学習に取り組む姿や、周りの大人たちが熱心に彼らをサポートする姿に出会うことができました。また同時に、現場が抱えるさまざまな課題についてもお話を伺う中で、ツアー参加者にとってはさまざまな発見や驚きがありました。

今回のツアーで出会った方々からの印象に残った言葉を記したいと思います。

- 外国につながる児童も日本人児童も安心して生活できる学校づくり。
- 外国籍の子どもたちだけを支援するのではなく、いかにして周りの日本人の子どもたちに日本にいながら複眼をもって接する人間性を養うか、多文化共生できる素養をつくるかという視点が大切。
- 地域の方には、とにかく外国の方を受け入れてほしい。ともに生きるという視点を持ってほしい。

この報告書では、平成19年度実施した「国際教育・多文化共生教育スタディツアー」をはじめとする事業の成果についてまとめました。国際教育の必要性、重要性を一人でも多くの方にご理解いただき、こうした取り組みが広がりをみせ、ともに行動してくれる人材が増え続けることを願っております。

(財)滋賀県国際協会

目 次

◇ はじめに	1
◇ 目 次	2

実績報告

◇ 国際教育・多文化共生教育スタディツアー報告	3
第1回「多文化共生の学校づくり～横浜市立いちょう小学校～ ＆海を渡った日本移民～海外移住資料館～を学ぶ」	
開催日 8月3・4日(金・土) 参加者 19人	
第2回「外国につながる子どもたちの学習支援現場 & ブラジル人学校の見学」	23
開催日 8月22日(水) 参加者 25人	
第3回「地域に発信～滋賀県朝鮮初級学校 公開授業見学～」	31
開催日 11月11日(日) 参加者 13人	
第4回「日本の学校に通う外国につながる子どもたち」	33
開催日 11月22日(木) 参加者 20人	

◇ 国際教育ワークショップ	
「地球市民を地域とともに育てよう Part 6 食べものをとおして世界のことを考えよう」	40
講師 日本国際飢餓対策機構 国際協力隊総主事 清家 弘久さん	
あおぞら財団 研究員 林 美帆さん	
開催日 平成 20 年 1 月 19 日(土) 会場 ピアザ淡海 305 会議室	
主 催 財団法人滋賀県国際協会	
共 催 独立行政法人国際協力機構大阪国際センター、国際教育研究会 Glocal net Shiga	
参加者 45 人	

資料集

◇ 滋賀県における外国人登録者数	61
◇ 国際教育研究会 Glocal net Shiga	62
◇ 国際教育・開発教育貸出教材リスト	64

実績報告

国際教育・多文化共生教育スタディツアー

第1回国際教育・多文化共生教育スタディーツアーの概要

＜テーマ＞「多文化共生の学校づくり～横浜市立いちょう小学校～
&海を渡った日本移民～海外移住資料館～を学ぶ」



▲今回のスタディーツアー参加者と事務局スタッフ

(JICA 横浜 海外移住資料館の前にて撮影)

いちょう小学校は、外国につながる児童(外国籍児童および外国にルーツのある日本籍児童)が多数在籍し、全校児童に占める外国籍児童の割合が38%、外国につながる児童全体では53%(H16年度)になります。こうした特色を生かして、国籍や民族の異なる子どもたちが、互いの違いを認めながら共に学ぶ多文化共生の学校づくりをめざして、さまざまな取り組みをすすめている学校です。

そこで、このスタディーツアーでは、いちょう小学校ですすめてこられた「全校チームティーチング体制(全校TT制)」をはじめとする学校運営、職員の協力指導体制や、国際教室の運営、多文化共生の授業づくり、地域や外部協力者との協働などさまざまな取り組みについて学び、滋賀においても多文化共生学校づくりの考え方を取り入れ、広めていく機会とします。また、滋賀県に暮らす外国籍の半数が南米系の住民です。彼らのルーツを辿ると、そこには日本移民の姿が現れます。日本はかつて移民を送り出す立場であり、当時の日本移民の様子や移民先での生活などに触れることで、今、移民を受け入れる側になった私たちにとって、見落としてはならない現実や歴史があるのかもしれませんが。海外移住資料館の展示やガイドによる解説を聞きながら、日本移民について理解を深めます。

＜スケジュール＞

【8月3日(金)】

■横浜市立いちょう小学校

◇多文化共生学校づくりについて講義

■海外移住資料館

◇日本移民に関する資料見学

【8月4日(土)】

■元いちょう小学校国際教室担当、
金子正人先生との懇談

＜訪問先施設 1＞横浜市立いちょう小学校

■横浜市立いちょう小学校の概要

いちょう小学校は、横浜市泉区上飯田町の神奈川県営いちょう団地の中に在り、子どもたちはいちょう団地から通学している。かつては田園風景の広がる農村地帯であったが、昭和40年代に団地が建設されて急激に人口が増加した。そして、人口の増加に併せ昭和48年5月に本校は当地に開校した。一時期は、児童数2000名を越える大規模校であったが、現在は児童数200名に届かない小規模校になっている。

いちょう小学校の特色の一つは、外国人児童が多数在籍することである。外国人児童が増えたのは、平成10年まで隣接する大和市に「インドシナ難民定住促進センター」があったことと関係する。センターを出たインドシナ難民の方々が徐々にいちょう団地に住むようになり、近年は難



▲いちょうの木は神奈川県が指定する代表植物の中の一つで、その名をとって県営いちょう団地ができた。その団地内に学校ができたので、いちょう小学校と命名されたと言う。その名の通り校舎内にはいちょうの木が数多く植えられている。



民の方々の呼び寄せ家族に加え、中国帰国者家族等も入居するようになった。

外国人児童は、平成元年頃から増え始め、現在は94名が在籍している。全校児童に占める外国人児童の割合は46.3%であり、外国にルーツを持つ児童（日本国籍取得児童）23名を含めた割合は57.6%である。つまり、全校児童の半数以上が外国につながる児童（外国籍または外国にルーツを持つ児童）ということになる。（平成19年5月1日現在）

●開校

昭和48年5月1日

（創立32年）

●学区：県営いちょう団地

●児童数：203名

●学級数：普通学級7学級

個別支援2学級

■横浜市立いちよう小学校の取り組み

いちよう小学校では金野邦昭学校長、国際教室担当の菊池聡先生、教務主任の山田昭先生が、本校で取り組まれている多文化教育についてプロジェクター一等で、具体的に説明していただきました。

(※以下の写真はプロジェクターでの解説風景写真)



いちよう小学校で先生方の多文化共生教育についての話を聞く様子。

【いちよう小学校の指導体制】（金野校長から）

コミュニケーションする力を伸ばすことを重視した指導

多文化共生の学校づくりで一番大事にしている柱は外国につながる児童も日本人児童も安心して生活できる学校づくりを目指している。横浜市では、各学校にマニフェストがあり、いちよう小学校も5年ぐらいを見通した中期学校運営計画を作っている。その中の3つ目「一人ひとりの違いを良さとして認め合い、互いに尊重して共に生きようとする態度を育てます」を学校運営方針の大きな柱にしている。同校の場合、日本で生まれている子どもたちが多い。そのためか、非常に落ち着いて学校に在籍している。しかし、玄関を出ると日本語ということで、母語でうまく話せない子どもも多く、親子の触れあいが非常に持ちにくいという状況がある。また、日本語においても生活言語は非常にできている状況だが、勉強は特に抽象度が高くなると理解ができにくい状況がある。例えば水というのは分かっているが、社会科の中で水道や蛇口といった違った言葉が出てくると、突然分からなくなってしまうという非常に難しい状況がある。



金野邦昭学校長

学校としてどういう力をつけていけばいいのか。それが日本の社会の中で生きていくということであれば、聞く力、話す力はもちろんのこと、読む力や書く力は、直接的には高校入試だとか、本当に社会で生きていくときの必要なものになっていくと思うが、そこまでいくにはかなり課題も大きいし、サポートしていかなければいけないこともたくさんある。そこで、同校の取り組みとして、まずコミュニケーションする力を伸ばすことを重視し、平成13年より東京学芸大学国際教育センターの齊藤ひろみ助教授に定期的に指導を受けている。例えば日常生活の中で、すぐ手が出たり、乱暴な言葉が出やすいというのは、自分の気持ちや考えがきちんと相手に伝えられないという実態がある。学習においても、なかなか自分の考えが述べられなくて、授業がうまくできないという状況もあり、伝え合う力をつける授業に力を入れている。

■横浜市立いちょう小学校校舎内視察

全ての懇談が終了後、3つのグループに分かれ、各先生の案内の元、いちょう小学校の校舎内を見学しました。多文化共生の学校づくりとは具体的にはどんなスタイルなのか、実際の目で見ること、いちょう小学校の真剣な取り組みを肌で実感できたのではないのでしょうか

【ワールドルーム】

カーペットや畳の部屋になっていて、上履きを脱いで入り、子どもたちが楽しくコミュニケーションを交わせるように、落ち着ける場所になっている。民族衣装のコーナーや、各国の特徴ある雑貨や本など、保護者から集められたものもある。



「民族衣装」
子どもたちが自由に着られるようになっている。

【世界の言葉】

廊下や下駄箱置き場など校舎内の至る所に10ヶ国語で書かれた言葉が貼られている。



番外編

いちょう小学校の校舎内は階段に平仮名が貼ってあったり、低学年の図書室などは楽しくディスプレイされ、校舎内全体が明るく、子どもたちにとって気持ちよく、楽しく学習できる雰囲気づくりに徹している。



【さまざまな多文化教室】

日本語の初期指導をする教室「日本語教室」や、交通ルール等を体で覚える「サバイバル教室」など、教室には工夫が盛りだくさん。



廊下に掲示されている習字の名前を見ると、さまざまな国の子どもたちが在籍していることがわかる。



【多文化共生を感じさせる工夫】

子どもたちが目につく廊下にはさまざまな多文化を感じさせる工夫を感じさせる。



【お誕生日】

学校の取り組みの中でも紹介していた「お誕生会」。その月のお誕生日の子どもたちの写真が貼ってある。



【体のなまえ】

札の表には各国の国名が。ひっくり返すと、その国の言葉で体の名前が書いてある。



【国の紹介】

子どもたちの出身国、中国、カンボジア、ベトナムを詳しく紹介。



全職員による協力指導体制＝「全校TT」を基盤に！

本校の職員体制は、日常的・継続的に職種を越え、学年・ブロック等の枠を越え、共通の願い・目標に向かって協業・協働していく「全職員による協力指導体制＝全校TT」を基盤にして、子どもたち一人ひとりが安心して豊かに生活できる学校づくりの実現を目指している。また、広く学校を開き、地域関係者はもとより、ボランティア団体や大学関係者等とも協働して、子どもたちのより確かで豊かな学習・活動づくりを工夫・実践している。



本校では、外国につながる子どもが非常に多いということで、国際教室担当に2人の教員が加配されている。6年生には児童生徒担当として1人加配されている。例えば日本語がわからない外国につながる子どもが入ってきた場合、全体を見る国際教室担当の先生が対応するというシステムの他、調理員、用務員、栄養士、個別支援という形で支援をしていく全校TT体制で一人に手厚く指導していこうという体制を作っている。

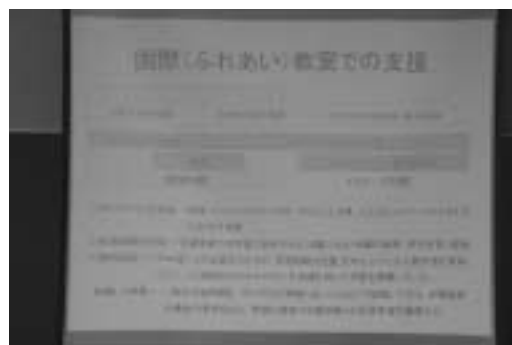
【ふれあい教室での支援学習指導について】

大きく二つの支援をしている。一つは外国で生まれ育って来日した子どもたちに対しての初期日本語指導。

東京学芸大学の齊藤先生と一緒に「サバイバル日本語」という独自の教材を作り、3か月か4か月指導して、教室の中に返す。その後も少人数担当として、ときには少人数に分けたり、入り込んで寄り添ってわからない部分を解決するという支援。もう一つは教科指導。本校の子どもたちはほとんど日本で生まれ育っているの、日常会話は完璧だが、勉強が出来ないという子どもたちが大半であるため、個々の生徒の在籍学級と協働した授業作りを行っている。例えば、一単元の単元構成がある(資料 A の在籍学級の内容)が、その指導ではついていけない子どもたち用に同じ単元で別の構成を作り(資料 A の取出学級の内容)、国際教室担当が少人数で分けて指導していくというもの。



国際教室担当の菊池聡先生



(資料 A)

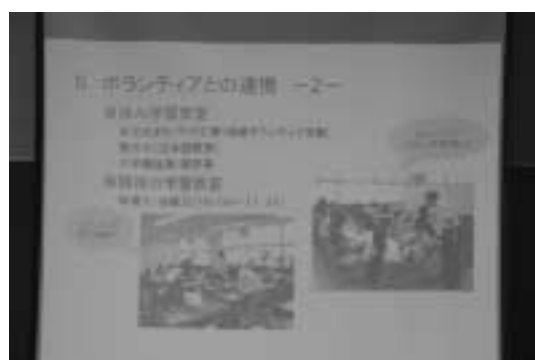
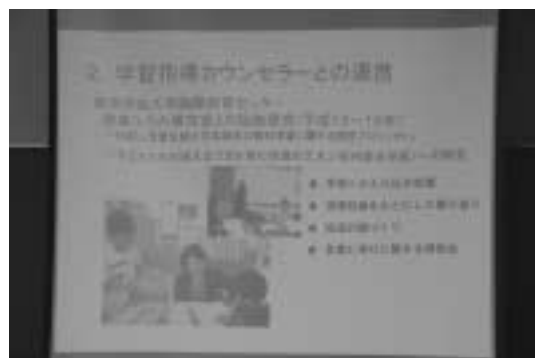
	在籍学級(2年1組19名、2組18名)	取出学級(2年1組4名、2組4名)
第一 次	■「スイミー」の感想を持つ。 ・ 題名に関心を持ち全文を音読する ・ 感想を発表し学習のめあてをもつ。 ・ 新出漢字や語句の確認をする。	■意味の分からない語彙や表現を押さえながら通読する。 ・ 漢字、カタカナにルビを書く。 ・ 意味の分からない語彙や表現について、絵や具体物、母語などを使ってやりとりしながら理解する。

【大学・地域ボランティア団体等との連携・協働】

同校に関わっている東京学芸大学国際教育センター齊藤ひろみ助教授の研究プロジェクト(外国籍児童への日本語指導に関わる研究、国際教室における日本語指導カリキュラムの開発研究)との協働研究は昨年度で終了したが、今年度も引き続き、毎週2回、同大学研究プロジェクトのメンバーが各学年への入り込み指導・支援や国際教室での実践授業を展開。また、アシスタントティーチャーとして、毎週2回、横浜国立大学の学生(2名)に学習支援者として協力を得ている。彼らには例えば休み時間や放課後に子どもたちと関わり、その日一日あったことを支援記録として書いてもらっているため、担任がなかなか目の届かなかったところを、実際に気付くということで、とても助かっている。

その他、地域のボランティア団体「多文化まちづくり工房」によって夏休みの学習教室を中心に子どもたちの学習支援を得、日常的な情報交換等を行いながら連携を図っている。

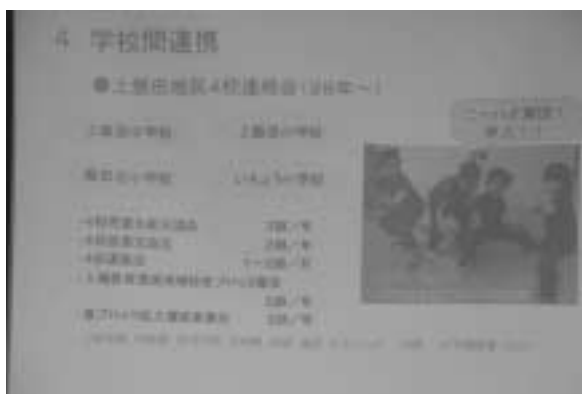
保護者との連携については、基本的に保護者の方々は昼間勤務のため、懇談会を夜に開いている。母語のコミュニティを作っていただくという大きな目的もあり、今年度は二回開催予定。



【上飯田地区4校連絡会の取り組み】

本校の他、他の2校の小学校も全て上飯田中学校に上がるため、1998年より設置された上飯田地区4校連絡会を立ち上げ、具体的には、4校代表者の計画による4校教職員の連絡会・研修会や4校児童生徒交流会の開催。さらには、保育園・幼稚園、高等学校、各ボランティア団体等との懇談会・情報交換会の開催など、地道な取組を継続実践している。

小中、幼稚園、高校だけではなく、団地も含め泉区全体が同じ問題を抱えているため、「いづみ多文化ネットワーク」というのを立ち上げ、様々な課題に取り組んでいる。昨年度は地震について防災リーフレットの多言語バージョンを作成。この地域の多くの人々がベトナム、中国、カンボジアといった地震のない国から来ている現状からも、住民の不安を取り除くことを目的に全家庭に配布する予定。



【多文化共生の具体的な授業について】

(以下山田先生)

同校は大きく二本の柱で考えている。一つは言葉の力、コミュニケーション能力。多文化共生を支える言葉の力。もう一つは、異文化理解という部分での授業。外国にかかわる子どもたちにとっては、日本の文化の中では少数派である。そういう子たちにとっても自己優越感のあるようになってほしいということで、いろいろな授業の場の中にいろんな多文化を積極的に取り入れている。サッカーのアジア杯で日本とベトナムが戦いました。子どもたちに聞くと、ベトナムの子どもたちは、日本の方を応援してたという子が多かったが、保護者はベトナムを応援していると言う。お母さんが作ったベトナム料理よりも、マクドナルドのハンバーガーの方が好きだとか、そういう、子どもと親との意識のずれというのが多分にあり、そのへんのずれを何とか埋めていくことも必要だと考えている。

例えば、4年生の「生き物について調べよう」では、ベトナム野菜づくりということで取り組んだ4年生の実践では、ベトナムの方のところに実際に行って、ベトナムの野菜の作り方を教えてもらい、ベトナムから来ている人たちがどんな思いでベトナムの野菜を作っているのか、そういう中で自分たちも育てて実際に食べてみようという授業をしている。同じく4年生の「住みよいまちづくり」では、中央道路にバイクで乗らないでというポスターを国語、ベトナム語等多言語で作って貼っている。また、全校遠足のしおりを作ろうということで、5年生が担当し、子どもたちは日本語がわかっても、家の人は分からない人が多いので、「水筒」「弁当」といった言葉を多言語にししおりを作り配っている。こうした勉強は子どもたちだけではなかなか出来ない部分があるので、外部からいろんな方たちに来ていただいて、授業づくりを進めている。



教務主任の山田昭先生



▲17年度の3年生の総合的な学習では「友だちの国を知ろう」ということで、ベトナムやフィリピンや中国の踊りを学習。



▲18年度の6年生の社会科・総合的な学習「私たちと戦争」をテーマに、戦争を通して友だちの国について考えようということで、ベトナム戦争やカンボジアの内戦の時の話を、それぞれの国の出身講師の方に語っていただく授業を展開。今年は、更に膨らめ、生徒に感想を書かせ、スピーチコンテストにまで発展させている。
※「よこはま子ども国際平和スピーチコンテスト」で市長賞を受賞した小・中学生 2 名は「よこはま子どもピースメッセンジャー」として国連に行きスピーチをする。

【多文化共生の学校行事の取り組み】



＜運動会＞

スローガンを多言語にしたり、またはその国の母語でみんなのスローガンを発表したり、保護者の方々に対して、子どもたちが多言語でアナウンスするようにしている。去年は中国語、ベトナム語、カンボジア語でした。ボランティア団体の方から3名も協力。昼休みの時間に、中国獅子舞を発表。



＜ワールドクラブ＞

ワールドクラブは母語・母文化体験クラブで、今年は子どもからのリクエストが多い獅子舞を、横浜中華街の中のリュウシダンというグループのリーダーの方に学校に来ていただいて教えてもらってる。地域の獅子舞の指導者もタン先生で、獅子舞クラブの二軍を作ろうということで、運動会もコラボレーションで一緒に出来ないかと考えている。



＜お誕生日カレンダー・お誕生日給食＞

外国にかかわる子どもたちには自分の誕生日がわからなかったり、家族や友達でお祝いすることを知らない子どもたちが多くいることから、いのちの教育の一環として、その日の給食にデザートをつけて、お誕生日給食ということで、学校全体でお祝いをする取り組みをしている。



＜卒業式＞

公的な場面で多文化というのを発信していくのが大事である。運動会、卒業式や入学式等も壁の方には各国語でお祝いを表記し、民族衣装で参加する子どももいる。先生もベトナムのアオザイを着たり、中国の服に着替えたりして、多文化を楽しみ雰囲気発信している。

【成果と課題】

■成果

- ①多文化共生を盛り込んだ活動を日常化することによって、子どもたちの生活に差別や偏見のない人権感覚が身についてきている。
- ②多文化共生を盛り込んだ活動を展開することは、外国につながる児童・保護者だけでなく、日本人を含めたすべての国の人々の共生感覚を養うことになる。
- ③子どもたち一人ひとりのニーズに合った支援を行うことによって、そこに居場所が生まれ、生き生きした活動が展開している。

■課題

- ①基礎学力の向上・日本語の習得という大前提の中に、多文化共生をどのように関わらせていくのか。
- ②多くの外部支援者との連絡・調整が難しい。



「これは毎朝日替わりで、本校の子どもたちに「おはよう」というのをあいさつをしております。わかりますでしょうか。今手に持っているのは「早上好（ザオシャンハオ）」、中国語ですね。なぜかこの中では「ザオシャンハオ」が、一番人気があるんですね。それぞれの国の挨拶をしているんですが、やっぱり子どもたちが自分の国の挨拶をしてもらおうと、すごく表情がゆるんで、とても気持ちのいい朝を迎えております。子どもたちの国、それぞれの国を大事にしているというメッセージもあります」金野校長談。

■ いちよう小学校の三者先生方との 質疑応答

多文化共生の学校づくりの取り組みの説明を伺った後、参加者の皆さんといちよう小学校の三者先生方による質疑応答となりました。



Q. いちよう団地には自治会組織があるのでしょうか。地域とはどのように交流しているのでしょうか。リーダーは外国の方なのでしょうか？また新しく入って来られた外国の方も自治会に入られるのでしょうか？その場合は日本語指導から始められるのでしょうか？

A. いちよう団地には第一から第八までの各自治会があり、全てが連合自治会という組織で動いています。その会長さん、役員さんはほとんど日本の方です。新しく入って来られた外国の方は自治会の会合にはなかなか入って来て頂けないのが現状です。ですから、そういう方には多文化ネット等の話し合いの場に来るだけ入ってもらおうという工夫しています。最近は若者が地域の中に入り込んできていますので、いろいろな形で応援しています。この間いちよう団地のバレーボール大会があり、若者たちの多文化共生チームを作り、地域の人たちとバレーボールをして優勝しました。そんな形で少しずつ外国の方も地域に入ってきていますが、そこは一つ大きい課題だと思います。

Q. 日本の子どもたちと外国につながる子どもたちとのトラブルはありませんか？また、外国につながる子どもたちのトラブルが起きた場合はどうしているのでしょうか？

A. いちよう小学校における外国につながる子どもたち

は滞在年数が長いので、国籍に関係なく保育園や幼稚園からずっと一緒にいる子どもたちが多いです。ですから、「何人^{なにじん}だから」ということでのトラブルは少ないです。もちろん、何人だからとは関係なく、普通に子ども同士のトラブルはいっぱいあります。生活の中で使う日本語はみんな上手です。特に「馬鹿野郎」とか言う、悪い言葉ほどすぐく達者で、みんな日本語でケンカをしていますね。喧嘩に関して言えば、子どもは日本語で言葉は通じるのですが、親同士は通じないケースが多く、例えば中国の子とベトナムの子が公園のシーソーのところでトラブルになり、大けがをしたことがありましたが、まず、学校に親が相談に来られます。学校は事実関係を子どもから聞いて、通訳の方をお願いして相手の親に伝えます。そうすると「いいですよ、子どものことだから」というので解決した例がありますね。ですから、学校の時間外で別の場所で起こったことでも関わっていくことになります。

Q. ジャイカ横浜が近くにありますが、その青年海外協力隊のOBとかコーディネーターの協力は得ているのでしょうか？

A. ここの学習支援者だった方には、関わっていただいています。実際にジャイカから来ていただいて支援していただくことはしていません。この地域にはこの地域独特の背景というのがあります。それ

を理解している方でないとトラブルになりかねないからです。例えば本校のベトナムの方だと、ホーチミンじゃなくサイゴンなんです。サイゴンは陥落してホーチミンに名前が変わっていますよね。ホーチミンという名前を言いたくないんですよ。赤い旗に黄色というのが国連で認められた旗ですが、それを目にしたくないんです。私の教室の前に国旗がはってありますけれども、隠してある。ベトナムの旗は黄色に三本ラインの赤い旗なんです。つまりそういうところの背景を理解した方じゃないとなかなか支援ということは難しいです。中国の方もほとんど残留孤児で来ていますので、そのへんのところをシビアに理解している人じゃないと、のちのちのトラブルになる要素があります。

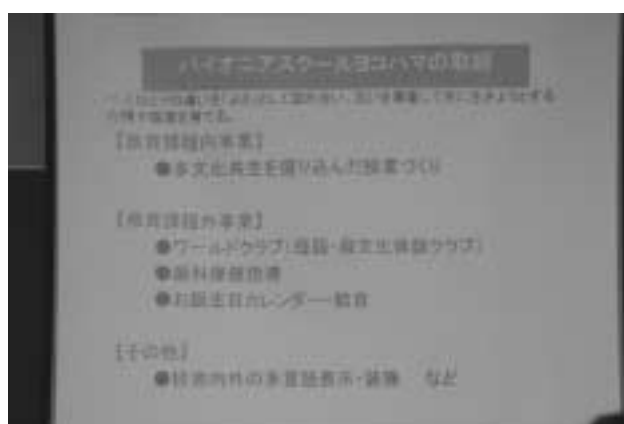
Q.通訳などのボランティアの方への謝礼などはどうにされているのでしょうか。こうした多文化共生事業に対しては運営費がかかると思いますが、その資金はどうされているのでしょうか？

A.ボランティアの方への謝礼はあくまでも交通費程度しかお支払いしていません。運営費は大きく二つで、一つは横浜市の方からパイオニアスクールに対する教育費ということで、微々たるお金ですが、多文化共生教育事業で予算は組んでいます。もう一つは上飯田地区4校連絡会で人権教育総合推進地域として頂戴しております。こちらの方は多額のお金をいただいておりますので、四校でうまく使いながらやっております。どちらも今年度で終わりです。ただ、三年前四年前に職員とこの事業について話をしている中で、お金がなくなっても細く長く続けられることをやっていこうということでスタートしていますので、何とか形を変えながらやっていけるのではないかと今検討しています。

Q.滋賀県でも不就学の児童のことが問題になりますが、いちょう小学校ではどうでしょうか。

A.不就学の児童を見つけると、学校にも区役所にも連絡が入るので、ここ最近ではないです。もう一つ、ここの中国、ベトナムの方は同族がすごく多いです。ですから、誰かが来ていなくても誰かに話すと通じるという身内のネットワークがあり、それでちゃんと学校に来られるのではないかと思います。家族だけで孤立していないというのが大きいですね。

また本校では不登校気味の子はいますが、不登校はいないですね。各教室にインターホンがありまして、朝、担任が欠席をしらべて、いないとすぐ教室のインターホンで連絡し、それを受けるとみんな右往左往して、すぐに家庭と連絡を取って、来ない場合は迎えに行きます。



＜訪問先施設2＞JICA 横浜国際センター 海外移住資料館

■海外移住資料館視察

横浜市立いちよう小学校の視察と懇談を後にして、一日目の最終日程、国際協力機構 JICA 横浜国際センター内にある海外移住資料館を見学に行きました。



＜海外移住資料館の概要＞

日本人の海外移住は、100 年以上の歴史がある。現在、海外で生活する移住者やその子孫の日系人の数は 250 万人となり、ここ10 数年、就労や勉強を目的に約30 万人の日系人とその家族が来日し生活している。こうした状況を受け、日本の海外移住の歴史および移住者と日系人の現在の姿を多くの人々に知ってもらうための資料館として設置。展示では、JICA が、戦後、主に中南米への移住事業の一翼を担ったことから、中南米とそれに先行するハワイを含む北米への移住を主たる対象としている。



1【企画展示ホール・ガイダンスホール】

ガイダンス映像が放映されているので、まず、ここで日本人海外移住者の概要を知った上で見学する。



▲「ローズ・フェスティバルの野菜山」

アメリカ合衆国オレゴン州ポートランド市近郊で農業を営む日本人が、1920 年のローズ・フェスティバルに参加し、自分たちが栽培した野菜や果物で山車を作成し、一等賞を受賞した時のことをボランティアガイドさんが詳しく説明。資料館内のスタート口に陳列。

2【海外移住の歴史】

日本における海外移住の歴史を5 期に分け、年表、分権、写真、映像によって各時代の重要な出来事を示している。世界移住マップ、都道府県別の移住者数を表した立体地図、ハワイの官約移民や書生、ブラジルのアリアンサ移住地、最後の移住船につぼん丸などのトピックスを取り上げたコーナーもある。



＜ハワイへの官約移民＞

1885 年から 1894 年まで 10 年間に、日本とハワイ王国政治間で結ばれた「移民協約」に基づいて、2 万 9000 人余の日本人労働者が、ハワイ諸島のサトウキビ・プランテーションで3 年間就労する契約で渡航した。

＜アリアンサ移住地＞

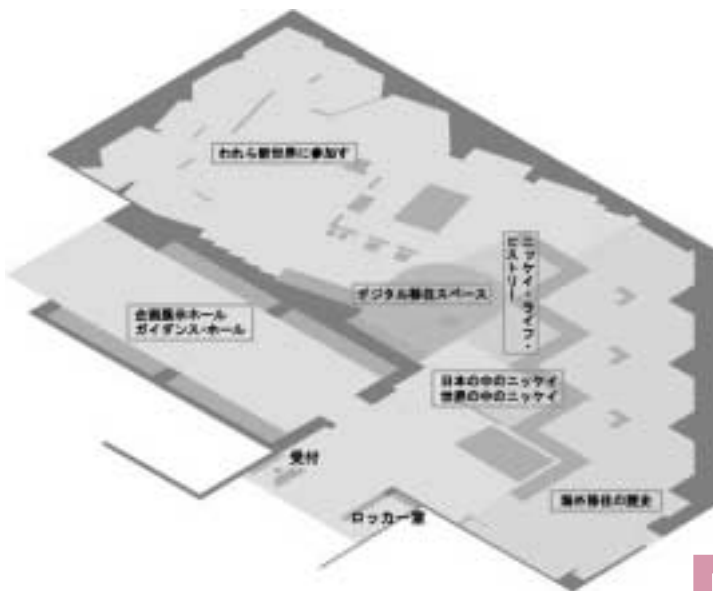
ブラジルでは 1910 年代になると、コーヒー農園の契約労働に見切りをつけ、独立農を目指した人たちによって、日本だけの「移住地」(自主農の集団地)が作られ始めた。そして、1920 年代になると、出稼ぎだけではなく、はじめから定着を意図した移住地が計画されるようになる。その典型がサンパウロ州西部のアリアンサ移住地。



▲都道府県別出移民数を立体グラフの高さで表わしている。1000 人で2mm、10000 人で20mm

3【われら新世界に参加す】

「なぜ海外に行ったか」「どんな仕事に就いたか」「どのように暮らしていたか」といった6つの問いかけを一緒に考えていくために、呼びかけのポスターや移住の手引き、農機具や看板、食器棚やごちそうのテーブルの再現といった、物品を中心として展示。また移住者たちは新世界での生活を通じ、そこでの新たな文明づくりに参加し、貢献してきた。大型映像や移住地の模型、標本資料などで、移住の背景、道のり、仕事や暮らし、コミュニティ形成について紹介。



▲海外移住資料館の見取り図



4【デジタル移住スペース】

世界の未来と移住を仮想的に体感するスペース。6台のコンピュータ端末で移住先国の基本情報や各種データ、展示資料の紹介などが自由に閲覧できる。また、天井から吊るされたスクリーンには未来に向けてのメッセージが映るようになっている。



▲山口県からハワイへ移住し、六世が誕生したハワイのビッグファミリー

「紙芝居・移民カルタの貸し出し！」

—図書資料室—

図書資料室では写真の4点の日系移民に関わる紙芝居やカルタを貸し出している。資料館見学の事前・事後学習など、さまざまな学びの場に役立てよう！

◎貸出期限／2か月以内(送付期間含む)

◎貸出対象／主に教育関連機関

◎貸出費用／使用料は無料。ただし、往復の送料は負担。

◎申込・問い合わせ／海外移住資料館 図書資料室

移民カルタ・紙芝居貸出担当係

TEL:045-663-3257 FAX:045-211-1781

開館時間:10:00~18:00

閉館日:毎週日・月・祝日・資料整理日(毎月の最後の開室日)・年末年始(12・29~1・3)



■元いちよう小学校国際教室担当、金子正人先生との懇談

二日目は、前日見学した海外移住資料館があるJICA 横浜で、元いちよう小学校国際教室担当、金子正人先生との懇談の場を持ちました。スタディツアー参加者と事務局スタッフの自己紹介の後、金子先生の多文化共生教育の講演があり、その後の質疑応答から一つのテーマ『“ネットワークを生かした外国人児童生徒支援”学校の中の22H』が浮上。金子先生の提案で、学校の教員、国際交流協会の方、大学関係、通訳や養護教師とそれぞれ違う立場で参加されたメンバーを4つのグループに分け、テーマを探るために30分間のグループでのディスカッションに入りました。

＜金子正人先生講演内容＞

学校は管理職が外国につながる子どもたちを受け入れるという姿勢をもっていなければ絶対変わらないということです。いくら、担当者が思いをもってがんばっても、管理職の理解をえられないとなかなか全体化していかない。いちよう小学校は学校全体として取り組みをすすめていくベースを何年間かけて作ってきました。根底にあるのは、外国につながる子どもたちだけを支援しようということではないのです。外国につながる子どもたちの多くは、経済的にも、言語の部分、学力の部分と、いろんな意味でしんどい状況にある。様々なハンディを負っている子どもたちが豊かで安心して過ごせる学校づくりというのは、多くの日本人の子どもたちにとっても過ごしやすい学校になるという理念を貫いています。ですから、国際教室の役割はもちろん外国につながる子どもたちへのサポートがメインですが、それだけではありません。国際教室担当の教師はいろいろな学級のサポートに入ります。算数のTTだったり、総合的な学習のサポートであったり、行事や遠足、体験学習にもついて行くことももちろんですし、ありとあらゆる場面で国際教室の担当がサポートしていきます。学習がわからないのは外国につながる子どもだけではなく、日本人の子どもでも同じ状況にあり、私たちがサポートをしていくことで全ての子どもたちにとってメリットがあるのです。子どもたち全体が理解を深めていく、あるいは落ち着いて学校生活が送れるようになるということだと思います。

私がいちよう小学校に着任したときには、学校の状況はあまりよくありませんでした。たとえば朝会の時には並べない、並んでも話を聞かない、こっちで話をしても好きなように話をしている子どもがいる。心ない言葉が飛び場面もたくさんありました。そこでまず職員が、一人でひとつの教室をかかえ込むのではなく、学校として取り組む体制を作っていこうと、当時の校長の主導で始めました。その理念のもと、教師全員が一緒になって取り組み、何年間かけてやってくる中で、やはり子どもたちがぐっと落ち着いてきました。その子どもたちの安



【金子 正人先生プロフィール】

横浜市教育センター指導主事。元横浜市立いちよう小学校教諭 国際教室担当。平成7年から3年間台湾・台北日本人学校に勤務。平成11年から2年間、文部省「外国人子女教育受入推進地域」の指定を受け、地域の学校で連携して外国人児童生徒を受け入れる体制づくりを行う。平成13年から2年間、文部科学省「帰国・外国人児童生徒と共に進める教育の国際化推進地域」の指定を受け、地域のボランティア団体等と連携して外国人児童生徒教育を推進する体制づくりを進める。また平成13年から2年間、文部科学省「学校教育における JSL カリキュラム開発に係わる協力者会議」に参加。平成14年から文化庁「親子の日本語教室」事業の委嘱を受け学校とNPOが連携して開設する新しい形の日本語教室を設置。平成15年には「上飯田地区4校連絡会」として「博報教育賞」および「文部科学大臣奨励賞」を受賞。

心の度合いというものが変わってきたんです。学校へ来たいろいろな人がいるから、何とか自分のわからないことを教えてもらえるだろう。とにかく自分の周りにいる大人は私を助けてくれる人なんだという思いが広がってきました。それが担任の教師でなくてもいいのです。校長先生だって構わないし、養護教諭だって、栄養職員でもいい。さらには大学の先生やボランティアで入ってくる学生さんであっても構わない。だから



子どもたちは非常に人に慣れてしています。人が入ってくると、「この人は私を助けてくれる人なんだ」ぐらいに思っていますので、袖とか引っ張り放題ですね。引っ張る子どもが日本人でも同じです。国籍に関わらず、誰でもそういう支援をしていく。全体として何となく共通理解を持ちながら、やってきたことによって子どもたちの落ち着きというものが出てきたのかなというところです。ただ、ここに至るにはかなり大きな葛藤もありました。最初に大学の先生（東京学芸大学国際教育センターの齊藤ひろみ助教授）が入ってくるにあたっては、職員の間には警戒感というか不安感があつたのも事実です。当初は警戒心の強い先生のところにはあまり行かないようにして、とりあえずいいよと言ってくれたところから入り込みを始めました。もちろん、最初は国際教室からですけどね。それで、だんだんと支援者が入ることによるメリットというものを実感として理解できるようになりました。そんなことで、少しずつ協働していく。そういう実践ができるようになってきたということなんです。課題としては、職員の協働の意識をいかに保っていくかというのが大きな課題だと思っています。

＜ディスカッションにおけるグループ発表＞

テーマ 『“ネットワークを生かした外国人児童生徒支援”学校の中の 22 時間』

【A グループ】

学校の中で柔軟性を持たせて、今日は給食の時間までというように、時間にフレックスに対応するというのも一つの対応ではないか。また、22 時間その席にすわっていても、子どもが来日した時期や年齢によっては、日本語のシャワーを浴びることで日本語に慣れ、一つでも単語を身につけられることになるのではないかと。理想としては、その子どもの状況によって全然違うので、ひとまとめにして 22 時間は苦痛だと決めつける必要はない。地域のネットワークについては、県立大と滋賀大で行っている受験生を支援するチューター制度を利用する方法もある。受験生には限らず、そうした支援制度を作ってもらふ必要があるのではないかと。実際は言葉が分からない大学生が入ったとしても、何か教えてもらえるという子どもの安心感があり、大学生というモデルを側で見られるという子どもへの影響も大きい。



逆に地域の人に対しても日本語教室への支援を求めてみてはどうか。問題は、周りで制度を整えてしまうと、

結局子どもにすることを決めつけてしまう恐れがある。その子の状態をうまく伝達できないということもあるので、学校やボランティアなどの連絡を密にするためにもコーディネーターが必要。

[Bグループ]

学校が悩んでいること、各教師が悩んでいることを、まず、まわりのサポーターに呼びかけていく必要がある。学校側がこんなサポートがほしいというプログラムやビジョンを持ち、サポートを求めれば、応えられるものもあるのではないか。また、学校側は全員で出来ること、個々に出来ることを分け、そういう視点も持って子どもたちにどんなサポートが必要かというのを求めてほしい。中学校教師の経験談で、子どもがどんな状態であるかをお互いに情報を共有し合うことでひとり一人のしんどさが救われたと言う。同じように保護者に対しても協力を求めれば、反応がある。また生徒たちにも、先生が悩んでいるということ率直に伝えてほしいとのこと。生徒たち自身も、何がその子どもたちのために出来るか、ということを考えていけるはず。人とのつながりを声を出して求めていくことが大事。

[Cグループ]

いろんな課題が出てきた。実際のところ管理職の方々においては、ある程度認知はしていても、なかなか具体的には策を練れないということ。サポーターの人については、教員免許を取得していないボランティアや外部の講師の方が教えるというのはなかなかオープンに出来ない。大学との連携については、確かなカリキュラムやプログラムのものがあれば教えられるのではないか。外国籍の子どもだけじゃなくて日本の子どもも課題を抱えた子がたくさんいるので、そういう子どもの取り出し授業という形でしていけないか。ただ学年も違ったり、背景もばらばらな子どもたちを一つに集めるとなると保護者の理解を取り付けた上でないと難しいのではないか。担当教員任せの現状なので、その方が頑張れば頑張るほど責任も負担も重くなるので、全体での取り組みが必要。いちよう小学校の昨日の説明を聞いた中で、地域に小学校が3校と中学校が1校あるということだったが、他の学校との温度差というのがあるのではないか、中学校に入ってからの不登校や進学については、どういうふうに対応しているのか。

[Dグループ]

マリさん(スタディツアーの参加者)が、13歳のときにブラジルから日本の学校に1週間通った体験談で、日本語が多少できても、やっぱり英語と体育以外はつらかったと言うこと。そうした子どもを支援するには裾野を広げていかなければいけない。次に支援する人はいても学



校側の受け入れ体制がなくてはできない。また、空いた教室を提供してもらっても、その教室を運営する人、コーディネーターが必要になってくる。最後にサポーターの免許という問題がある。そういうサポーターを教育委員会で研修して、免許を取得させ、教育委員会のお墨付きができると一つ進むのではないかな。

＜金子先生から一各班のディスカッションのまとめから出た質問について＞

● 大学生のサポートについて

指導しているのは教員ですから免許ということでは問題はありません。学生は授業の時間は徹底的にサポートして子どもたちに勉強をチームで教えます。その中で、記録としてA4一枚に特に感じたことをそのまま書いてくれます。書き方はまちまちですが、そのメモを通して教員とサポーターとの間のやりとりが出来ていくということが一つあります。これが生徒の指導に大きな影響を与えています。教員が1時間授業するのにあたって、それに対する子どもたちの反応を返してもらえということですね。

この提示の仕方ではこの生徒たちにはよく分からなかったとか、自分の授業はここが問題なんだということがわかる。要するに日々の授業評価で、これはとてもメリットがあります。

● いちよう小学校の回りの2小学校と1中学校との取り組みのちがいについて

当然あります。学校によって外国につながる子どもの数も違いますし、それから中学校に行けば全然違う課題もあるわけ



すから、どこの学校もすべて同じような指導をしているわけではありません。ただ連携は密に取ろうよということで4校連絡会というのをやっている中で、それぞれの担当者が話し合いをしたり、管理職が話し合いをしたり、カラオケにいったり、飲み会をしたり(笑)、そうしながら進めていくということです。子どもたち同士の交流では、中学校のなかなか活躍する機会のない外国につながる子どもたちを盛り上げるような、自尊感情を持てるようなそういう取り組みとして子どもたちの交流集会ということもやっています。温度差があるのは事実ですが、連携する中でお互い理解を深めています。授業参観も行きますね。外国につながる子どもと関係ない授業参観に行ったり、教職員が全員集まって研修会を行い、そこに**保育園の先生や高校の先生に来てもらって子どもたちの18年間の育ちについて話し合いをしよう**とか、あるいは歯医者さんに来てもらって口の中から見える日本人の子どもと外国人の子どもの育ちについて考えようとか、文化や習慣が違うので、そういう面白い話をしてもらうこともあります。いろいろな仕掛けを作って少しずつ先に進んでいく。何年もかけてやっていこうということです。



参加者レポートより

■いちょう小学校の取り組みについて

★校内や教室の掲示には多文化の子どもたちへの配慮があり、また周りへの子どもたちへの働きかけ効果も感じられ、素晴らしいと思います。言語環境も、様々な言語を大切にしながら、日本語の教育もしっかりと身につけられるように努力されていました。ただ気になったのは、中学校進学後不登校になる子どもがいるということです。中学校とも連携して、子どもたちの進学や就職を手助けし、本当の共生を実現する地域づくりに取り組むことが大切だと思いました。

★廊下や階段の側面などに、5か国語で手作りのサインを作るなど工夫が凝らされており、教室も手作りのものが多く、校内に心温まる雰囲気がありました。

学校の中に留まらず、地域と連携して問題解決に当たる姿勢が素晴らしいと思いました。

★国際教室の取り組みは、取り出し授業における各学年単元の取り組みが素晴らしかった。別カリキュラムの作成と学年担任との連携が大変だが、子どもたちにとって原級での所属感が高まる。

★最も印象に残っているのが、「全職員による協力体制」というシステム確立である。このシステムは、「(直接)支援に関わる職員」と「指導に関わる職員」、「外部からの支援」の三者をうまく機能させて、全校協力体制が実施されている点である。私の知るある滋賀県内の小学校では、外国籍児童生徒を担当している先生に負担が集中し、学校全体で外国籍児童生徒の支援や取り組みが機能していない現状がある。いちょう小学校の「全職員による協力体制」システムは、今後の滋賀県内の小中学校に必要なものである。また、「外部からの支援」の点では、滋賀県内にも支援ボランティアや大学内のNPO関連団体など多くの人材が揃っている。こうした地域における人材からの協力も今後は期待できる。滋賀県においても、いちょう小学校のような体制作りは、可能ではないかと感じた。

■海外移住資料館の見学を終えて

★日本からブラジルに渡り、苦勞しながらもたくましく生きた1世の人々。そして、その子や孫である2世や3世の人々が入管法改正により、働くために日本にやってきた。どちらも、言語も文化も違う中でたくましく生きる力強さを持つ。そのたくましさを伝える教育を進めていきたい。

★本当に小さなスーツケースで海を渡った日本移民の方々。テレビや映画で、ご苦勞を伝えるお話はたくさん見てきましたが、実際の生の声を伝える資料館を見学するのは初めてでした。在日外国人の方も、母国の言葉や文化を異国（日本）で守っておられますが、それは本当に大変なことなのだなと思いました。「みんな違って、みんないい」という温かい社会をつくりあげていかねばならないと痛切に思いました。

★ブラジルに行く日本人には健康診断が課せられたり、衣服が消毒されたりしていました。また現地でも「日本人である」ということで差別があったようです。「自分は日本人だ」という思いで辛苦をくぐってきた人たちやご家族が、今回日本に帰られてまた「外国の人」だと思われるの

はすごく変だと思いました。

★当時の日本人移民がどのように生活し、またブラジルやアメリカがどのように日本人移民を受入れていたかを振り返ることができ、多くのことを教えられた。日本の教育現場や地域社会で、日本人移民の歴史や日系社会について学ぶことは、今後において重要なことであると感じた。

■いちょう小学校 元国際教室担当教員との懇談を終えて

★まずは、“日本語しゃべっているから問題なし”という認識を変えること。子どもたちのバックグラウンドも含めて正しく理解することが必要。中学校の教師は、教科担任制になるので、自分の言っていることが伝わる、伝わらないかでしか考えることができない。その子の言葉の力、読み書きの力について、小学校の先生より知る機会が少なく、それが一番の問題と考えます。

★現場の教師の問題意識として、目の前で手持ちぶさたにしている外国籍の子どもに対して何もできない自分に歯がゆさを感じることを提起させていただいた。安直な解決ができない問題であるので、じっくり行政なども巻き込んでいかねばならないと思います。

★最も印象に残ったのは、「外国人の子どもたちだけを何とかしようとしているのではない」という発言である。一見して外国籍児童生徒を対象にした支援や取り組みは、日本人の保護者の視点からすると「特別扱い」のように受止められることが少なからずある。いちょう小学校では、外国人だけでなく全校児童を支援の対象としたことで、学校全体がよい方向に向かっていった。外国籍の子どもたちが通いやすい学校は、日本人の子供たちにとっても通いやすい、また学びやすい学校なのだと改めて感じた。

★いちょう学校では、地域などからサポートをする人が多く学校内に入っていったことを述べられていた。子どもたちからこのような人達が「助けてくれる人」と認識されるようになり、学校と地域という非常によい関係が作り上げられたという。地域も巻き込んだ取り組みのよい事例だと感じた。

■今回のツアーに参加したメンバーから学んだこと

★草津から横浜まで、長時間のバスの移動だったのですが、全く退屈せず楽しいバス旅行になりました。それは、いちょう小学校についての取り組みをクイズ形式で復習（予習）させてもらったり、移民の歴史のドラマ『ハルとナツ』のビデオを見たり、見学後には、「どんなことを感じたのか」などをマイクで発言してみんなでシェアする時間を設けたりと工夫を凝らしていただいたからです。

このことで、メンバー間に友情が芽生え、たくさんの人の想いを知ることが出来ました。それぞれに、外国や日本国内で、異文化体験をされ、国際教育・多文化共生教育の必要を肌で感じておられる方ばかりでした。

今後も、このスタディーツアーに参加させていただき、参加したメンバーの横のつながりから、滋賀県の国際教育・多文化共生教育の現状を学び取りたいと思います。

第2回国際教育・多文化共生教育スタディツアー

<テーマ>「外国につながる子どもたちの学習支援現場

& ブラジル人学校の見学」

ワールドアミーゴクラブは、外国にルーツをもつ児童・生徒の日本語指導や学習支援活動を行なうと同時に、ゲームや食を通じてそれぞれの母国の多文化交流なども行いながら、子どもたちの居場所づくりを行なっている団体です。今回、この団体の活動に参加し、子どもたちの学習に対する姿勢や彼らを支えるボランティアから、外国につながる子どもたちへの学習支援のあり方などについて学びたいと思います。

滋賀ラテン学園は、日系ブラジル人によって作られた学校です。現在、保育園から高等部(2歳から18歳)まで、300人以上の乳幼児、児童、生徒が在籍しています。すべての授業が母語のポルトガル語で行なわれています。地域の外国人学校の授業を見学し、彼らを取り巻く現状と課題を探りたいと思います。

ワールドアミーゴクラブ

まず子どもたちが個々に持ってきた夏休みの宿題などを、ボランティアとともに取り組んでいる様子を見学をしました。アサガオの植木鉢を持ってきて観察日記を書く子どもや、算数や漢字のドリルに一生懸命取り組む子どもたちの姿がありました。



ワールドアミーゴ見学風景

この日のプログラムは、1時間の学習の後、子どもたちのお楽しみである『おやつタイム』、そしてレクリエーションとして大型絵本の多言語による読み聞かせを行なっていました。

また当日は、市内の小学校教員が人権研修の一環として活動に参加し、ワールドアミーゴクラブが外国籍の子どもたちのためだけの場ではなく、研修の場としても活用されていることを知りました。

見学後、ワールドアミーゴクラブ実行委員会の皆さんに参加者からの質疑に応えていただきました。



<スケジュール>

【8月22日(水)】

午前

■ワールドアミーゴクラブ

(会場 近江八幡市人権センター)

◇外国人児童生徒学習支援活動の見学および活動についての講義

午後

■滋賀ラテン学園

◇ブラジル人学校授業見学および学校についての講義

Q ワールドアミーゴの活動の経緯について

A 5、6年に当時近江八幡市役所にあったパートナーシップ推進課(現 まちづくり支援課)の外国人相談員から、ブラジル人の母親から夏休みに勉強を見てもらえないかという相談があることを知らされた。そこで、「ラテンアメリカ子どもクラブ」というニューカマーの子どもだけの勉強会の取り組みをはじめたが、当時「ハムケモジャ」という在日コリアンの高校進学支援の活動も同じ会場で活動していた。この二つの活動に関わっていたメンバーがほぼ同じだったので、翌年からは一緒に実行委員会形式で活動を行なうことになった。

行政との協働ということで、教育委員会が案内チラシなどの学校への配布、パートナーシップ推進課内の市国際交流協会(現市国際協会)が事務局をもち、ボランティアに参加する教員が勉強のサポートと子どもの送迎をと、それぞれが役割を担うことになった。そして2、3年が経過した後、正式にボランティアを募ったところ、学生や主婦など市民の方々が手を挙げてこられ、今のような状態になった。

2年前からは、進学したいという子どもたちが出てきたことを受けて高校進学指導をスタート。また昨年からは、毎週土曜の午前中に子どもたちの居場所としての活動がすすんでいる。また市内小中学校の教員の研修の場としても活用されている。

Q. ワールドアミーゴクラブは全くのボランティアなのですか？

A ワールドアミーゴクラブ実行委員会は、市教育委員会をはじめ行政の担当課や小中学校の先生・市民ボランティアで構成しており、

「近江八幡多文化共生市民ネットワーク」の中の一つの組織として位置付けられている。

実際のところ、週末は全員がボランティアとして活動している。

Q. 近江八幡では教育委員会などどのようにつながっていったのか？どのようにコーディネートしてこられたのか？

A. この地に、おもしろい人材がいたんですよ。外国籍の子どもたちに関わってきていた教員がいたこと、そして外国人相談員から問題の集約ができていたことなどから、絶えず市の担当課の中で問題意識が出てくるようになっていた。すると職員が活性化し、「外国人だけではなくこれは日本社会のあり方の問題なのだから、日本人はどうするのか？」というふうになった。ただ、行政が主導でやると、経費に対する成果が問われるので、施策が先にできない。それならば、「ボランティアが活動をするとなれば、文書は市の担当課が出してくれるのか？」という動きになった。

ハムケモジャの活動として、当時在日コリアンの保護者、子どもたち、先生、先生の子どもが集まっていたが、これも学校教育課から通知を出してもらっていたという経緯もある。

当然のことながら、ニューカマー、在日外国人の子どもを指導しようと考えて教師になった人はまずいないだろうと思う。カリキュラムもそうだし。先生たちは彼らを日本人と同じように扱うのがよいだろうと、日本語のできない子どもにも夏休みに絵日記を書いてくるようにという宿題が出される。もちろん子どもたちにはできない。以前、ある小学校のブラジルの子どもに日本語で書けないのなら、ポルトガル語で絵日記を書いて先生に出したらいいと言ったことがある。少しいたずらのつもりで、「もし

先生が読めないと言うのなら、なぜ僕たちには日本語の宿題をだすのかと言ってくればよい」と言ったことがある。

10年前、在日朝鮮韓国児童生徒教育指針がでた。当時近江八幡市では、3 年間で学期ごとに教員が勉強会を行なったことで、意識が高くなったという経緯もある。そして、よい人材がつながって、その財産があり、バランスがとれ、うまく軌道に乗ったということだろう。

湖南省、長浜市からも視察に見えて、初期指導教室という形で活動を進められている。

このクラブはおもしろい会で、ボランティアは自分自身の力も、車も、交通費も、参加費も出すというシステムになっている。ボランティアには、「ここで子どもたちと出会って何かを得てください」という発想が基になっているためだ。



安 実行委員長らによる質疑応答風景

在日2世の自分(安さん)が幼いころ、してほしかったこと、こんな先生、こんな場所があったらいいのという想いがアイデアの原点。たぶんニューカマーの子どもたちもこうしてほしいと思っているだろうと。ここにすれば、同じ国の子どもがいる、安心できる場所一居場所、こんなに自分のことを心配してくれる先生がいるということを知らせる場をと。

冬には、日本の文化を外国人の子どもに教えている。こうした活動のキーワードは「楽しい」。企画する側が楽しければ、参加する側も楽しいはずだ。

ただ、小学校1年生に入ってからでは遅いだろうという問題が見えてきている。例えば、日本式の弁当の作り方や、ピアス、小中学校の違いなどの話など。そこで、人材派遣会社と協力し合いながら、託児所(無認可)をスタートした。保護者に日本の教育のシステムや、どんな資格が必要か、落第制度がないことなどを紹介するなどしている。できるだけ早い段階で、保護者とコンタクトを取り、情報を提供することが重要であると考えている。

サポートハウスみんなの家(鈴木さん)より

外国人の方の全体的な支援という趣旨で今年7月にスタートしたばかり。二大事業として、保育園と外国人サポートを行なっている。勤務時間が長く日本の保育時間に合わないため、日本の保育園に行かせたくても行かせられない。送迎は、朝6時からバスでまわり、全員が帰るのは20時半という長時間保育を行なっている。目的としては、多文化なので、今はブラジル人だけだが、これから先は日本人はじめいろんな人を受け入れたいと思っている。そして、保育をしながら、日本の学校のシステム、制度の情報提供などをしたい。

Q. 勤務する学校にブラジル人の2年生がいる。ここではどのような日本語指導をされているか？

A ここでは、子どもとまず仲良くなる。レベルに合わせて数種類のプリントは用意しているが、常時来る子どもばかりでもない。

学校では、日本語の分からない子どもには非常勤講師による取り出し授業(週数時間)がある。以前、金田小学校で加配教員をしていたが、文科省の資料は活用しきれない。ゆったりした雰囲気をつくらないと、日本語を教え込もうと思ってもうまくいかない。まずは安心できる場づくり、そうすると生活の中から日本語がついてくると感じている。また県教育委員会の研修には、行きたい教員がいけない時間帯に設定されていることが多いようだ。

中学校でも、取り出し国際教室を作って週4時間日本語の先生に来てもらい指導している。簡単なレベルのドリルなどを使って指導している。テストは中国語は翻訳してくれる人材がいるが、他の言語については、ひらがなで対応している。ちょっとほっとしにきてストレスをほぐす場になっているようだ。

中学3年ではじめて来日した子どものケースはたいへんだった。ほとんどの時間が取り出し授業だったし、対応する教員の時間確保もたいへんだった。結局、不登校気味になってしまった。そこで、この子からポルトガル語を教えてもらうことにした。すると、その子どもは毎日学校に来るようになったという経験がある。

県教委には、日本語のできない子どもへの支援制度としてほっとサポーター制度がある。また、「外国人児童生徒に関する指導指針」の根幹は、学校で外国籍の子ども、保護者、教師を巻き込んで多文化共生のまちづくりをしろという理念が出ている。学校全体で取り組む、担任・学年に任せるのではなく、保護者、PTA、地域を巻き込んでやるんですよと理念に書いてあるので、参考にしてもらいたい。

Q たいへんだけど、理想的な形で取り組みが進んでいるように見て取れ参考になった。今後、外国籍の子どもたちが増えていく中で、ボランティア団体の活動も大事だが、行政、学校、企業などとタイアップを考えておられるか？一番ベースとなる大事な考え方(構想)は？

A 今は、短期的な教育をしている。夢物語に近いかもしれないが、理念として、その子どもたちが社会の主人公になった時にどんな社会になっているか、少子高齢化の社会で、どんなにロボットをつくっても、ロボットは年金を払ってはくれない。年金を払ってくれる人をつくらなければならない。結局は「人」ということになる。同郷の人たちに「日本は暮らしやすいから、おいで」と言ってもらえるような国になっているか。大事なことは、ニューカマーの子どもに支援することではなく、いかにして周りの絶対多数の日本人の子どもたちに日本にいながら複眼をもって接する人間性を養うこと、多文化共生できる素養をつくるかということだ。そうでないと、(外国人支援を)してやっているということになってしまう。共生できる子どもをどうやってつくっていくか、ということを教育現場でかわっていく観点が大事だと思う。

これからの重点課題は、自治会との折衝。自治会に外国人が入会していく。外国人と肩の触れ合う関係づくりをすすめていくこと。個人情報保護法のもと、災害時などで日ごろからつながっていないと、つかめない状況が起こることが想定される。自治会の中で、外国人を排除するのではなく、この人がいたからちょっとラッキーだと感じられるような、日ごろからの軽いふれあいの中から、たとえば多国籍料理の交流など楽しいことでいかにつながって

いくかだろうと思っている。しいては、全体的な多文化共生に、外国人にとって住みよいのではなく、日本人にとって住みよい社会、日本の有り様としてすばらしい社会なんだというふうに考える必要がある。

指針ができたときに、日本に来るなら日本語ぐらい勉強して来いと言いたくなるという意見も出た。しかしよく考えてみると、地域の学校の先生は日本人学校の教員ではない。地域の学校は、地域の人たちが来る学校だ。ところがいつの間にか、日本人しか来なかったのので、日本人以外がくるのはおかしいという発想が出てきた。地域の学校が、地域の多文化共生のコミュニティーと考えると変わってくるだろう。

また行政が民間を利用することがある。実際には、活用してもらいたい。活用してきた中で、ともにやっていくという考え方が必要だ。少ない予算で、生きがい、社会益、住民益となることには、比較的みんなが協力できるのではないかと思う。民間は、7割が派遣の時代。いかに市民運動の中で行政とタイアップしながら、よりよいものができるのかが課題だろう。

実態調査をしてもらったが、近江八幡市では不就学がゼロ。ただこれには、トリックがある。日本の教育では、義務教育を親が子に施す義務があり、受ける権利を持っている。(子どもの権利条約、ユネスコ無償で教育を受ける権利もある。)文科省も考えているようだが、すべては地域の子どものためのだから、地域で学力を保証する。これは、当たり前のことだと思う。

そこで、近江八幡では学齢簿を作ることに

なった。学齢簿を作るということは、学校にいるべき子どもをすべて拾い上げるということ。これで、学校に通えない状態の子どもの数字を一度洗い出し、その子どもをもともと行政にある不登校を扱う施設(セクション)に入れて、そこで日本語を指導し、各学校へ戻すという仕組み。一旦不登校の数は大きくなるが、また学校に戻れるようになると、不登校児童の数が大きく減るということにもなる。外国人児童生徒の少ない地域には、プレスクールは効率が悪いので、こうした仕組みが有効であろうということで進めている。

県内の他の市町では「不登校＝不就学」という扱いである。2年前まで近江八幡市もそうだった。それを変えるように学校教育課と話し合った。

Q 来ている子どもたちは、どうやって会場まで来ているか？

A ボランティアの教師が送迎している。自家用車で、家まで朝起こしに行き、つれてくる。担任が声を掛けたことで、子どもがやってきたというケースもあった。身近な者の声掛けが大切なのだと感じている。



滋賀ラテン学園

滋賀ラテン学園の概要について説明を受けた後、校内の案内を受けました。どのクラスでも、生徒たちが生き生きと母国語で授業を受けており、ここはブラジルなのではないかと錯覚するほどでした。見学を終えた後、参加者からの質問に答えてくださいました。



滋賀ラテン学園の概要

ブラジル人の子どもが増えているので、教育面で何とかしようということで、2001年に甲西町でスタート。

生徒の増加により、2004年に竜王町へ移転した。現在、生徒は2歳から高校3年生までの330人が在籍。中学校を出ると工場に働きに行くことが多いため、高校生は少ない。生徒の90%以上がスクールバスで通学。少数は親が送り迎えをしている。



幼児昼寝風景



授業風景

この学校では、「POSITIVO」というブラジルの私立学校で使われているカリキュラム・教科書を使用している。カラー刷りの教科書で、日本は教科別の教科書なのに対し、ブラジルでは1冊の教科書に1学期に習う全ての教科の内容が盛り込まれている。日本語の授業はない。4学期制なので、年に4冊使っている。

日本にはないシステムとして、落第制度がある。ブラジルでは2月が新学期。12月の学年末試験で不合格になると落第する制度があり、同じ学年でも異なる年齢の生徒がいる。5年生までは一人の担任がすべての教科を指導し、それ以上の学年は教科別の担当教員が指導している。





9:10~3:20 一日6時間(各50分)授業で、土曜保育も行なっている。

体育の授業はあるが施設がないので、市の体育施設を借りてバスで送迎して授業を行なっている。

学費は、授業料3万円、送迎と食事代で大体一人当たり5万円の負担。どこからの補助も受けていないので、すべて学費で運営している。

日本語の能力については、日本の学校に行っていたため日本語が話せる子もいるが、ブラジルから来て1週間という子どももいるので、レベルはばらばら。最近、ブラジルに帰らない家族が増えている傾向を感じている。また日本で生まれ育っているのに、日本語ができない子どもが増えていることも感じている。

Q. 一生懸命勉強している姿が見受けられたが、勉強の意欲についてはどうか？

高校3年生は9人。卒業して大学に行く子もいる。昨年4人ほど通信制大学に進んでいる。本国の大学に進む子もいる。ただ、金銭的な問題があるので8年生(中学)が終わると、仕事をしたいと考える子どもが多い。昨年も28人卒業したおよそ半数が仕事に就いた。勉強を続けるのは、難しい状況といえる。

Q. 地域の学校との交流はあるか？市の体育施設は有料か？

A 大野小学校、河西小学校、甲南第3小学校、三雲東小学校と交流することになっている。

体育施設については市へ施設使用料を払っている。学校とみなされていないので、遠足で琵琶湖博物館やディズニーランドなどに行った際も学校割引にしてもらえなかった。

今使っている机やいすは、下田小学校から譲り受けた。

Q. 不登校はあるか？

A いない。いじめがないことは、すごいと思う。あまり根に持たない気質であり、みんな同じという感覚がないので、違っていても基本的によいと思っているようだ。

Q 日本の学校にいかない理由は？

A 子どもが行きたくない場合や、親の考え、言葉の問題などがある。また日本の学校に適応できず戻ってくる子どももいる。そして、日本人の子どもたちとの接触がないようだ。休日や放課後、近くに住んでいても接触がない。

Q ポルトガル語がわからない子どもが編入してきた場合は、どのような対応をしているか？

12歳の子の場合、9歳のクラスにいれ、試験に合格したら11歳のクラスに入るなどの措置を取っている。それがもし7歳の部屋に入るのは、まわりが幼すぎて嫌だと言うと思う。ただし、日本の子どもに比べるとあまり気にしないように感じる。

今後、週2時間の日本語の授業を設けて、日本語の授業を強化したいと考えている。特に高校生にはすぐ社会に出るので、日本語の授業を週4時間に増やしたいと考えているが、実際には教員が足りない。また日本語を覚えたい気持ちはあるが、ちょっと覚えたくらいでは使うところがないので、あまり学習に対する意欲がわかないようだ。

現状として日本語の教員だけでなく、すべての教科の教員が足りない。ちなみに教頭は、ポルトガル語(国語)の教員だが、週30時間指導している。

学年が上がるにつれて、生徒数は減ってくる。特に高校生は少ない。現在では、工場で14,15歳の子どもには仕事をさせないことになった影響か、学校に入れていることが多くなってきた。以前は14歳も働けたので仕事をしている子どもも多かった。

また、課題として常に生徒の転出入の変動がある。滋賀からブラジルに帰って、また滋賀に戻ってくるケースが多い。また親が働いている工場に、子どもも就職することがある。

Q 5万円の学費は、どの程度の負担なのか？

過酷な労働をされているので、収入的にはある程度ある。とはいえ、兄弟で通学させている家庭などでは、多少割引があるとはいえ、かなり負担は大きいだろう。

Q 休みはどのようにすごしているのか？

ビバシティや、夏はプールなど。学校に来ないと、友達と会えない。

Q 卒業資格について

中学校卒業資格となる。卒業生で河瀬高校の定時制に通っている子もいるが、現実には高校に進学するのはかなり難しい。卒業すれば、日本の学校に進学は可能だが、授業についていくのが難しい。日本史などはわからない。

Q ブラジルへ戻るとわかっている子にとってはよい環境だと思うが、日本の社会に出て行くと考えると学校としてはほかにサポートすることは考えていないのか？

学校の外では、どんな大人になるのか心配はしているが、現段階ではそこまで考えるのは難しい。

第3回国際教育・多文化共生教育スタディツアー

<テーマ> 「地域に発信～滋賀朝鮮初級学校 公開授業見学～」

この学校は、終戦後、滋賀県に住む在日朝鮮人子弟のアイデンティティを守り、育むための自主学校としてスタートしました。49年の強制閉鎖を乗り越え、50年からは日本の公立学校の中に「平和の光」「平和の誓い」「帰国記念碑」で知られる民族学級が20校近くでき、60年には、これらを順次発展的に統合し、体系的な民族学校 滋賀朝鮮中級学校が設立されました。

朝鮮学校では、豊かな民族性や自主意識を育み、自己を確立できる人、仲むつまじく豊かで活力のある同胞社会、地域社会を築くことができる人、日本社会と在日朝鮮人社会、南北祖国と日本社会、国際社会を繋ぐ人を育てるため、民族科目(国語、社会、音楽など)や日本の学校教育に準じた教育を行っています。また、朝鮮語(ハングル)と日本語教育にも力を注ぐとともに、「一人はみんなのために、みんなは一人のために」をモットーに人を思いやる心の教育に力を注いでいます。

今回は、毎年恒例となった「公開授業」の見学を通して、在日コリアンの子どもたちの学校生活について学びました。

<公開授業風景>



幼稚班 いすをバスに見立てて、動物園へさあ出発！

子どもたちは、歌を聴いて質問にハングルで答えたり、リズムに合わせて体を動かしたりして楽しく遊んでいました。



初級1 国語(朝鮮語)の授業風景

『ポンポンはねるよ』というお話を用いて、「どこまで跳ねる？ぼくのボール、背の高さまで跳ねる！空高く跳ねる！」と朝鮮語の正しい発音を身につけるために、楽しく朗読の練習をされていました。各自が文章を作り、話に合わせてボール遊びをしていました。



初級4 社会の授業風景

日本各地の果物の主要生産地について、スーパーのチラシ広告などを使い、日本の白地図に色を塗りながら学んでいました。



＜校内の掲示物＞



粘土をつかってハングルの練習



滋賀県内のゆかりの地について調べてありました。



自分たちの学校(ウリハッキョ)について紹介してありました。

＜子どもたちの発表＞

ハンドベルや合唱、民族打楽器「サムルノリ」の演奏が講堂で行われました。たいへん生き生きと民族の心がこもった素晴らしい演奏でした。



—参加者からの感想—

- 校長先生の挨拶の中で、「ウリハッキョの素晴らしさ、楽しさを伝えたい」と言われたが、実にいいことだ。「子どもの笑顔が見える」教育ということも強調されたが、未来の民族教育に明るい希望の光が見える気がした。
- 今回発見したことは、学校で使われている教科書が在日の子どもたち用に作られていたことです。特に興味をひかれたのは、4年生から始まる社会の教科書です。歴史はやはり朝鮮からの視点で描かれているような感じがしましたが、祖国の地理よりも実際に住んでいる日本の地理のことがメインに載っているし、公民・現代社会の分野では日本の社会制度や三権分立のことを学ぶようになっていました。
- 朝鮮学校の先生方は事件や世相に流されず、ブラジル人学校や日本の学校、各地の言語教室、車椅子の人たちへと、ますますつながりを広げておられることに大きな力を感じました。マイノリティでありながら、それを守り、またマジョリティとも連携していく。日本の学校の方が、マジョリティを守ろうと閉ざしているのかもしれませんが。

第4回国際教育・多文化共生教育スタディツアー

<テーマ>「日本の学校に通う外国につながる子どもたち」

湖南省立水戸小学校は、県内でもっとも外国人児童が在籍する小学校です。全校児童380人に対し、54人が外国籍の児童です。水戸小学校内の日本語教室での授業を見学した後、担当教諭からお話を伺いました。

日本語初期指導「さくら」教室は、平成19年9月に始まった県内で2番目の初期指導教室です。日本の学校に初めて通うことになった外国人の子どもたちが、スムーズに学校生活をはじめられるように学校での一日の流れや教室で使われる日本語について3ヶ月間指導を受けています。この初期指導教室での授業を見学し、子どもたちの様子や保護者との関係について教員から説明を受けました。

湖南省立水戸小学校日本語教室

この日は、4年生の授業風景を見学しました。1時間の授業の中で国語と算数の学習が行われていました。

国語では、漢字や物の数え方を学んだり、「食べ物」の絵が描かれたフラッシュカードを用いて、食べ物の名前を子どもたちの個々のレベル(漢字で書ける・カタカナで書ける・ひらがなで書ける)を考慮しながら、書き取りの学習をされていました。また算数では、在籍学級ではまだ学習が始まっていない単元を先行して指導することで、子どもたちが少しでも学習に入りやすくなるように配慮されていました。この教室では9月からチームティーチング制を導入され、2人の教員が子どもの机を回りながら、きめ細かい指導をされていました。

授業見学の後、日本語教室担当の永井先生にお話を伺いました。

<スケジュール>

【11月22日(木)】

午前

■湖南省立水戸小学校日本語教室
◇地域の学校での外国人児童を対象とした日本語教室についての研修会

午後

■日本語初期指導「さくら」教室
◇初期指導教室での授業見学および教室についての研修会



食べ物の絵の描いたフラッシュカードを用いて



チームティーチング風景

この4月から日本語教室の担当になり、どうしたらよいかわからない状況で半年がすぎました。4月からで転入が14名、転出が11名という具合に転出入がとても激しいです。現在54名の児童が在籍し、そのほとんどが日本語指導を必要としています。そのうち半数が日本語教室に通っています。

もっと日本語教室に呼びたいのですが、指導者数が限られており対応が追いつかず、日常会話がある程度できる子は各教室で対応をしている状況です。子どもによって通う時間も個人差があり、低学年では1時間、多い子でも週8時間のみ来ています。基本的には日本語と、日本の学校生活に適応できるように指導を行っていますが、学年によっては算数や社会の補充も行っています。ほとんどがブラジル国籍の子で、クラスに5, 6人在籍している状況なので、普段はポルトガル語で生活しているようです。2, 3年前までは、クラスに1, 2名と人数も少なかったので子どもたちも日本語を話さなければ生活ができないので、どんどん日本語を覚えてくれましたが、今は日本語を覚えなくても生活が成り立つのでなかなか上達しません。だから、この教室にきた時だけは、日本語にたっぷり浸ってもらいたいと思って指導しているところです。

Q. 週8時間日本語教室に通っている以外は、各クラスにいるのか？

A. 加配教員が1名しかいない現状では、対応ができないというのが本音です。

Q. 指導体制について

A. 日本語指導支援員の方には、生活について伝えるくいことを通訳してもらい、簡単な翻訳もお願いしています。あと二人、一人は湖

南市費で週12時間、9月から来ていただいています。もう一人は、県費で週9時間来ている講師がいます。おかげで、午前中びっちりチームティーチング制で運営できるようになったので、2学期からはかなりうまく学習ができるようになったところです。

Q. 子どもたちの日本語のレベルがまちまちのようですが、指導で工夫されている点は？

A. 去年は、差がはげしかったので、部分的に個別指導に取り組んでいましたが、(習得状況により)待てない子どもたちが飛び出したりする状態になってしまったようです。ひとりひとりの力を伸ばしたいとは思いますが、クラスに帰ってクラスの学習にスムーズに入れることが大事と考えたので、一斉指導を基本にしています。ひらがなを考え込んでから書く子や、漢字でもすらすらと書ける子がいます。「早くできたら静かに待つんだよ」、「友だちにちょっと教えてあげる姿があるといいな」と思っています。ひらがな、カタカナ、漢字と個に応じて指導していますが、もっともとしてあげたいと考え、教員に余裕があるときは、レベルを二つに分けて指導する時もあります。

Q. 「さくら」教室ができた効果は？

A. ブラジルから直接来た子の中で希望があれば3ヶ月「さくら」教室に通えることになりました。文字や学校での生活習慣を覚えてきてくれると期待しています。

さくら教室ができる前は、ブラジルから直接やってきた子が学校に入って来ていたので、「せんせい」ということばとトイレの使い方から指導していたこともありましたが、大変ありがたく思っています。

Q 日本語指導支援員(通訳)と先生と学級担任、管理職との横の情報交換・連絡があるか？指導補がおられるが、指導者同士の連携、研修があるのか？県レベルであるのか？

A. 日本語指導支援員の先生は、週4時間しかないないので、他の先生と一緒にという時間はとれません。日本語指導支援員と私。私と担任という連絡の状態。

担任との連携が大事だと感じ、普段の何気ないことでも、担任と話すようにしています。学校の中では、外国人児童教育の推進委員会をもち指導の連携を図っています。

4月に初めて受け持ったときに、カリキュラムもない、何をどう教えていいか全くわからない状態で、真っ暗闇を歩いているような感じでした。県の加配教員は小中合わせて10人ほどいるのですが、加配の会議は各学期に1回ずつです。夏休みに東京の会議に行かせてもらったのが勉強にもなり、刺激にもなりました。

市内では、加配は私1人になりました。各学校に窓口担当がいて、学期ごとに一度会議があるのですが、今年はさくら教室の立ち上げで忙しく1学期はなくて、昨日初めて集まりました。でも、指導法についてまで触れるほどにはならなかったのも、もっともっと研修の場がほしいというところです。

Q. 日本語教室にくる子とクラスに残る子の目安は？

A. 明確な境目はありません。担任との相談で状況をみて、4月当初来ていなかった子どもでも、日本語指導が必要だと判断した場合は、受け入れるなど柔軟な対応をしています。

Q.家庭との連携については。

A.行事について保護者に説明するためには翻訳した文書を使っています。個人的なことは、担任が電話連絡をします。通訳が必要な際には、派遣会社のスタッフやポルトガル語のできる教員に頼んでいます。年間、不定期ではありますが、保護者会も開催しています。

Q. 文書の翻訳はどうしているのか？

A. ポルトガル語、スペイン語、中国語の文書翻訳集を使ったり、自分が古い資料を探したり、インターネットの翻訳サイトを使って作成しています。日本語指導支援員に依頼することもあります。

Q. 中学へ行ってからの状況は？

A. 日枝中学校へ進学しますが、本年度は中学校には加配教員はいません。そのためなのか、小学校の時は日本語が話せていた子が、中学に入ってからさくら教室へ通っている事例もあります。

Q. 母語の確立と日本語習得との関係についての印象は？

A. もちろん個人差はありますが、母語が身につけている子の方が、日本語についても伸びるという印象があります。

Q. 地域に望むことはなんですか？

A. とにかく受け入れてほしいということです。ともに生きるという視点を持ってほしいです。日本人ばかりが通う学校に比べて、水戸小の日本の子どもが受けているメリットについても理解してもらいたいと考えています。

※記述については、平成19年11月22日現在のものが資料などになっております。

日本語初期指導「さくら」教室

9月から始まったこの教室では3ヶ月間の指導を行っているため、あと1週間後に第1期卒業生を送り出すというまとめの時期でした。

授業では、卒業時に保護者を招き「ニャーゴ」という作品を使って発表することを目指して、子どもたちが輪読を行っていました。

授業が終わり、子どもたちが下校した後、室長の藤原先生よりお話を伺いました。



9月、10月と最初緊張していた子どもたちも、11月に入り、スタッフや友達にも慣れ、自分を出し切っているというように感じています。

湖南省では外国人児童の数が多く、また日本の小中学校に入っても適応しにくいという実態から、さくら教室を立ち上げるという話を6月にいただきました。初めてのことで戸惑いましたが、まずは子どもを実際に見ていく中でということで9月からはじめました。

さくら教室の目的は、日本の学校で楽しいなと感じてもらうこと、基本的な力となる日本語の力をつけることです。また子どもだけでなく、保護者に母国と日本の学校のシステムの違いについても知ってもらうために連絡を密にすることです。



学校のきまり、一日の流れなどを知らせて体験させています。主に、教室の中で先生がどのようなことばを使うか、また毎日の生活の中で当番制があることなどについて理解を促しています。そして、ひらがなの読み書き、カタカナの指導をしています。

保護者へは、学校というのはたとえば掃除があり、給食があり、みんなと一緒に食べることなどを伝えていきます。また保護者会など学校からのさまざまな行事についても話しています。

さくら教室では保護者会を月に1, 2回行っています。給食の試食会、授業見学への呼びかけ、子どもが日本文化体験で折り紙を学びますよといった声かけをしたりしてきました。そして、「さくら教室だより」を1, 2週間に一度、月2, 3回ペースで発行してきました。

スタッフは、室長、指導員、通訳の3名です。

この教室を始めたときに、教室の中ではできるだけ日本語だけを使いたいと当初はがんばっていました。最初は子どもたちも緊張しており、おとなしくしていたので、通訳にも必要な時のみと頼んでいましたが、だんだんと自我がでてくると日本語で「だめです！」といった指導では到底収まらない状況ができました。そういう場合は通訳が母語で指導をしています。全員がブラジルの子どもたちです。日本語の通じる子どものなかに1, 2人がいるというのであれば、日本語の指導を徹底することも出来るのですが、給食や休み時間などでは、どうしても母語がでてきてしまうので、なかなか難しいところだなと感じています。いろいろな日本語のことばを覚えてきていますが、日常会話に使えるところまでいっていない状況です。

同じ国の子どもたちだけで3ヶ月暮らしていると、つい母語が出てきてしまい、なかなか日本語を日常使うというのは難しいです。しかし、これから日本の学校に通うことになると、日本人の子どもとのコミュニケーションのとり方の中で障害になっていくのではないかと感じています。

さくら教室は、市内全域を対象としているので、通学方法が一番大きな課題になっています。昨日開かれた連絡会議では、各小学校で日本語が通じなくて困っているが、送り迎えが親御さんにとって難しくなっている現状の報告がありました。水戸小学校の子どもたちについては、学区内なので、集団登校ができるが、その他の学校の子どもについては、通学するのが遠く、保護者が送迎を行っています。石

部南小学校からフィリピンの子どもが10, 11月に通っていました。岩根、下田小学校の子どもも送迎をしてもらっています。9時から、3時15分までなので、8時半に登校し、3時15分にお迎えに来てもらっています。

中学校在籍生徒は、バスで通ってきています。

給食と掃除については学校の雰囲気を味わせたいので、水戸小学校に通っています。給食を食べ、休み時間を過ごし、週に2日は掃除をして教室に帰ります。

学校の雰囲気がわかるので、遊具を使うなどして水戸小学校の子どもたちと遊んでいます。しかし、日本人の子どもたちと一緒に遊ぶということは難しいようで、ブラジル籍の児童や、さくら教室の子ども同士で遊んでいます。どうしても自分の居心地のよいようにこじんまりと遊んでいるようですが、仕方がないのかなとも思います。

日本文化についての指導、日本語の指導、日本の学校生活について指導しています。定員は20名で、8月の終わりに9人、9月3日に13人、9月4日に15人、10月1日に16人と急激に人数も変動して、はじめてのことで狭いところに、スタッフもどういう感じが良いのか四苦八苦しながらの毎日でしたが、子どもたちが、一生懸命勉強し、ひらがなも書け、読めるようになりました。ただ、読めても意味的なことがもう少し理解できないようで、「『かなしい』ってどういうこと？」など、特に中学生については、「て、に、を、は」といった助詞の使い方の指導定着に難しさを感じます。

現在小学生は、1年生が3名、2年生 4

名、4年生 5名、6年生 1名が在籍しています。彼らは、学年に差はあっても日本にはじめてきた状態ですので、ひらがなから始めるという段階なので、指導の方は一斉で同じような歩調で行っています。ただし理解度は年齢によって差があります。

さらに、中学校の子どもが3名在籍しています。この子どもたちに聞くと1番困るのが「勉強がわからない」ことだと言います。日常生活のことや単語はわかるので会話はできるのだが、学習についていけないというところをどうしてあげたらいいのか苦労してきました。スタッフが限られていることもあり、悩みであります。今、中学生を対象としたクラスの必要性を痛切に感じています。

ここでは、自分で勉強する姿勢・習慣を身につけてもらいたいと考え、8時半から9時までひとり勉強の時間というのを10月から設けて、ノートを作って字の練習をしました。こうして、学校、教室では勉強するという習慣をつけさせました。

またブラジル、フィリピンとは学校の様子が違うようですが、日本の学校では必ず宿題があるので、毎日宿題を与えました。子どもと一緒に保護者にも、「一生懸命に子どもの方を見てやっていただかないと、勉強はもちろんいろんなことに対してプレッシャーを、大人以上に抱えているんですよ」ということを伝えています。子どもも一生懸命勉強しているので、保護者にも一生懸命宿題や連絡帳を見てあげてくださいと伝えています。子どもたちはちゃんと宿題をやってきます。時々忘れてきて、朝やっていることもあります。出すんだなということは習慣づいているようです。

保護者から、子どもから質問されても答え

られないので、自分たちも勉強したいという声がありました。そこで、子どもが学校で習った物の名前、例えば「まど」「れいぞうこ」など書いた紙を家に持って帰らせ、家の物に貼り、子どもたちが読み上げるので、親御さんもそれを聞いて覚えてみてくださいと伝えたりしました。

また10月から毎日連絡帳を書くようにしました。学校では連絡帳に毎日あったことを書いて帰るので、親が必ず見るということが続けられました。

「今では、子どもたちが私にポルトガル語を教えてくださいます。自分はポルトガル語がなかなか覚えられないのに、子どもたちには日本語を覚えろと指導していて…(笑)」と、お話になっていました。

参加者からの質問にお答えいただきました。

Q. 子どもたちは学校に在籍しているのですか？

A. 籍は、それぞれの学校にあります。出席は、さくら教室に出席した数を在籍校に伝え、と学校出席日数に換算されます。

Q. 在籍校との連絡は？

A. お願いしていますが、なかなかできていません。校長先生が見に来られたりしますが、担任の先生に来てほしいと伝えています。水戸小学校の子どもが9人いて、毎日学校に給食などに通っているが、担任との交流ができていなかったのも、最後の週にはうまく引き継いでいきたいと考えています。

Q. 一番最近入ってきた子どもは？

A. 10月にフィリピンの子どもが入ってきました。その子も11月末で送り出すことになりました。2ヶ月では、指導も十分ではないので12月いっぱいまで通われるように提案しましたが、送迎の負担が大きき難しいということで、残念ながら、涙ながらに送り出しました。

Q. 基本的にさくら教室は3ヶ月という期間で区切っておられますが、到達習熟レベルの差があるままに送り出されるというのは、なぜですか？

A. 子どもによって習熟度が違うのですが、これだけの狭いスペースで過ごすのでは3ヶ月が限界であると感じています。またマンツーマンの関わりが多くなってくると、だんだん子どもたちにも甘えが出てくるので、そういう意味でも3ヶ月というのがよい区切りだと考えています。これから運営していく中で、もちろん学校へ戻ってからも、一番の基本は、日本の学校で外国籍の子どもたちも楽しく学習ができるということなので、そういう方向へのお手伝いをするというふうに考えています。

でも、どうしても1, 2ヶ月地域の学校で過ごしてみて、どうしてもという状況の子がいたり、また相談してこちらに戻ってくることも考えていますが、まだ送り出した経験がないので、子どもたちが学校へ帰って適応してくれるかは未知数です。子どもたちの様子を見ながらケース、ケースで対応していかなければと思っています。

夏休みに入ると、6, 7月にやっとひらがなを覚えたのに、夏休みの期間ですべて忘れてしまうということも多いです。

指導している側もだんだん欲が出てきて、ここでもう少し指導してあげた方が良さだろう

にと欲が出てきますが、指導体制も整っていないので、それを言い出すときりがありません。

Q. この教室だけで、3人しか先生がいないと16人の生徒を一斉に指導するしかないのか？分割するのは難しいのか？

A. 中学生を別に分けて、習った言葉を使った例文を作る、漢字を書くなど別の課題を与えるなどはしています。

Q. 教材は、どのようなところからひきだしているか？今回の教材「ニャーゴ」の意味を子どもたちは母語で理解しているのか？

A. いろいろなところから、子どもたちの理解度に合わせてよさそうなものを使っている。今回は、読むことを中心にしているので、どこまで意味を理解しているかはわかりませんが、母語での説明は必要に応じて入れています。

Q. 内容意味を理解するよりも、読むことを優先させた基準は？

A. 個々に、日本的な発音でせりふを発せられるということ。今後は、お面を作ったり、動作をいれるなどの劇化のなかで理解を促していきたいと考えています。日本語でと思っていたが、これはこういうことだよと母語通訳を使いながら、指導していくことも必要と感じています。また短文的な「これは何ですか」「これは～です」というロールプレイは、いままでの授業の中でも取り入れています。読み聞かせ、大型絵本の読み聞かせも何度か実践しています。

また何かよい助言がありましたら、よろしくお願いします。